倭文庫三拾九編
第二十號
上
へ13
3749
19

門へ13
號 3749
卷 19

倭文庫 一拾九 編上卷

戊午春新彫

万亭應賀作

歌川國貞画

釋迦八相倭文庫三拾九編序

夫言葉多くハ品少くと古語に戒められど童蒙や少女連に聊善道を悟さんとそも一事を再々回り説て悄くその半事も通じ難ん哉やれば覚えんと一事を再三再四説ゆへ種及史の北丁ゑれば益に困じつ然とそ亦愚筆を詞宮が編まれバ根末不解本が著夫も亦不作意両道難もに少の驛宿をくねと案の長途杖と机につくと閑てきに寂釈迦仏昼目達に何難と迦葉難陀羅睺羅にも多く扉とぴつ舎利弗法堂の閑に口とべ弓久一三寶さ臣の夢の幕ハ歌舞妓乙女に及猿夫婦に奈落の禁忌も弥叶き一十万億土のそれハ方便それハ狂弁

安政五年戊午孟陽

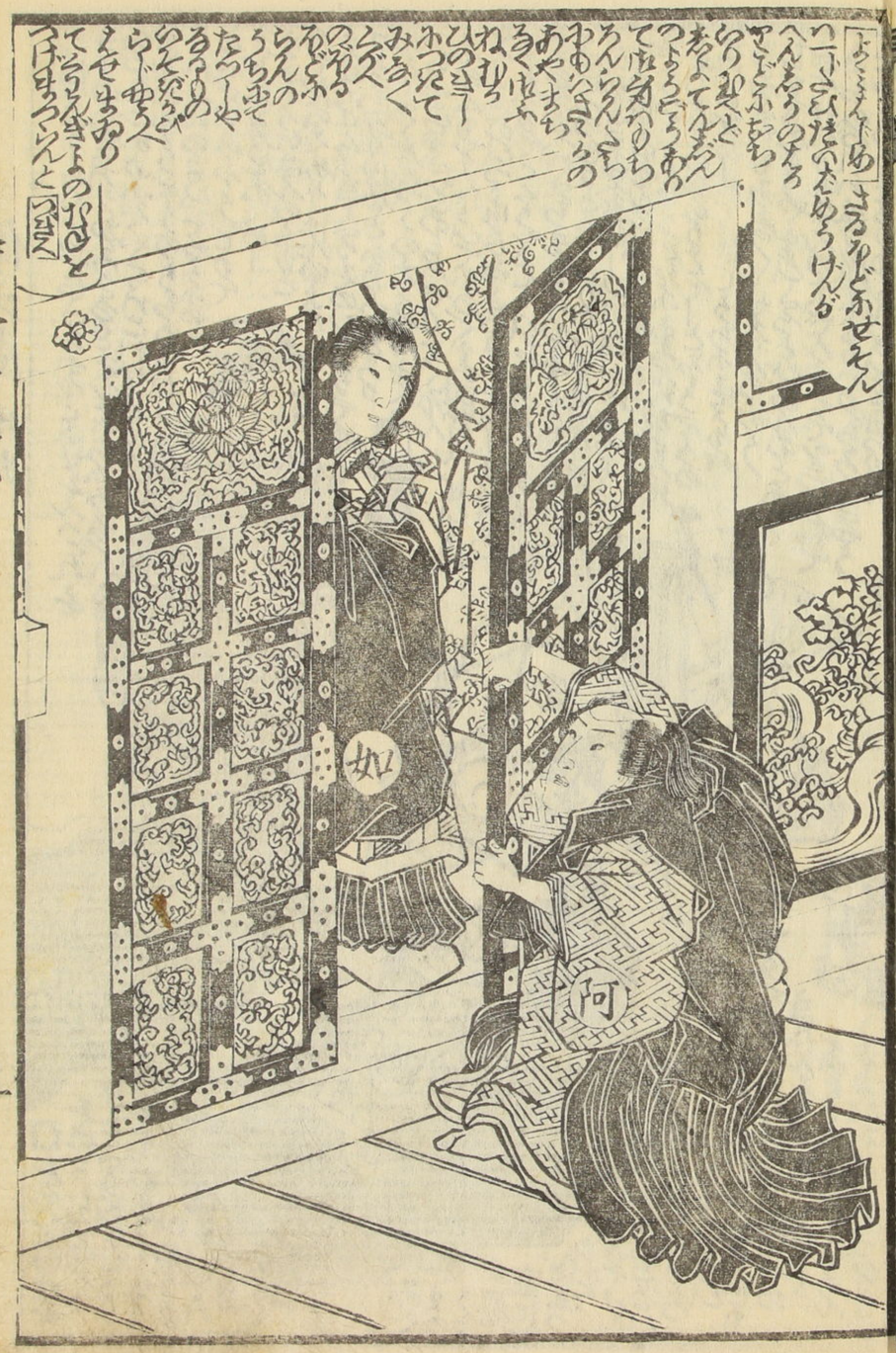
万亭應賀誌

❶浄土を見せしめ給ふ
難陀太子

世尊神通方便そ
難陀羅睺羅
虚空風火水地
波羅維斯那城
雪山及び天都
地獄❶
義伯仙人
無間地獄の亡霊
羅睺羅

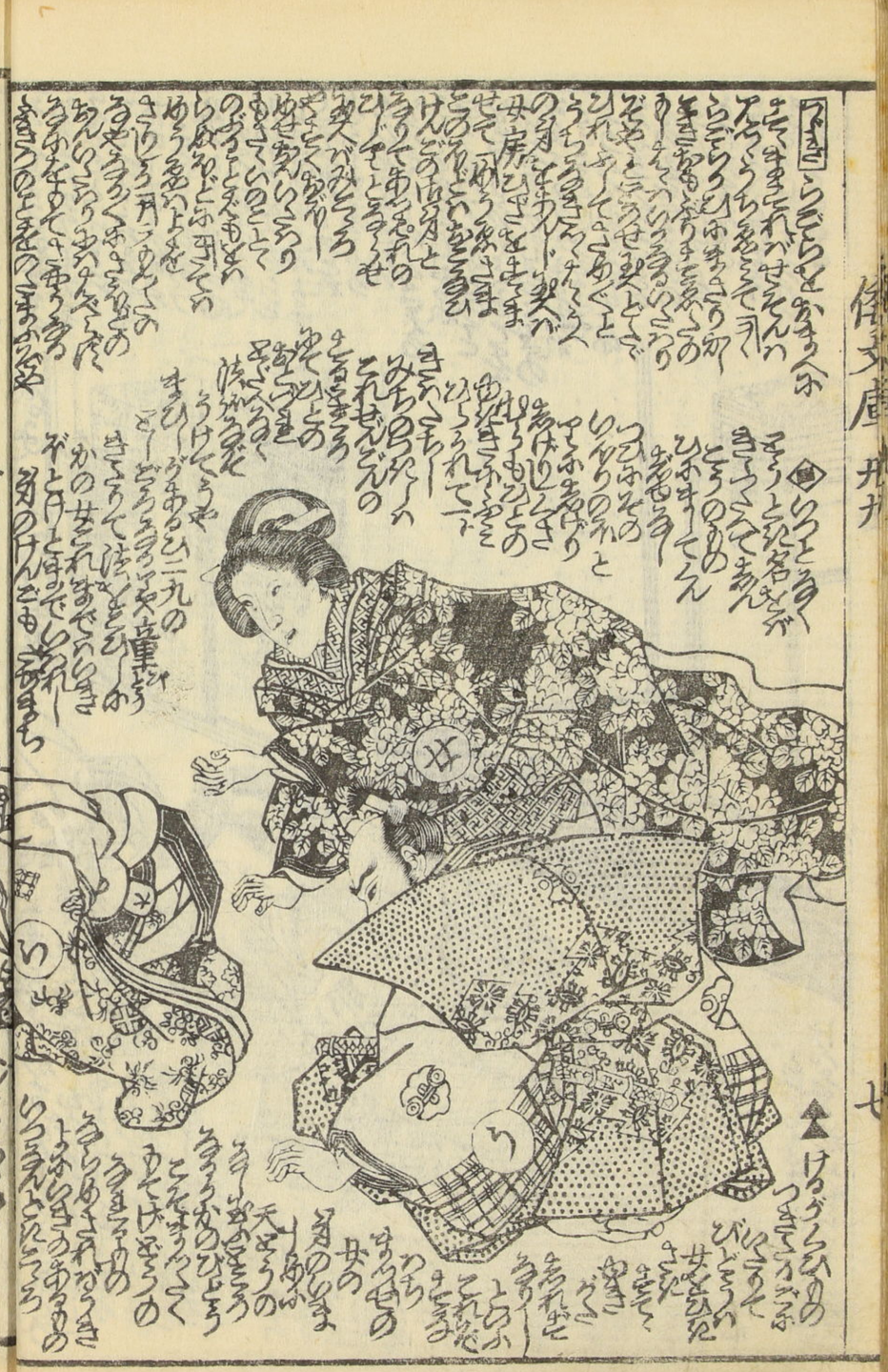
妙恵比丘尼

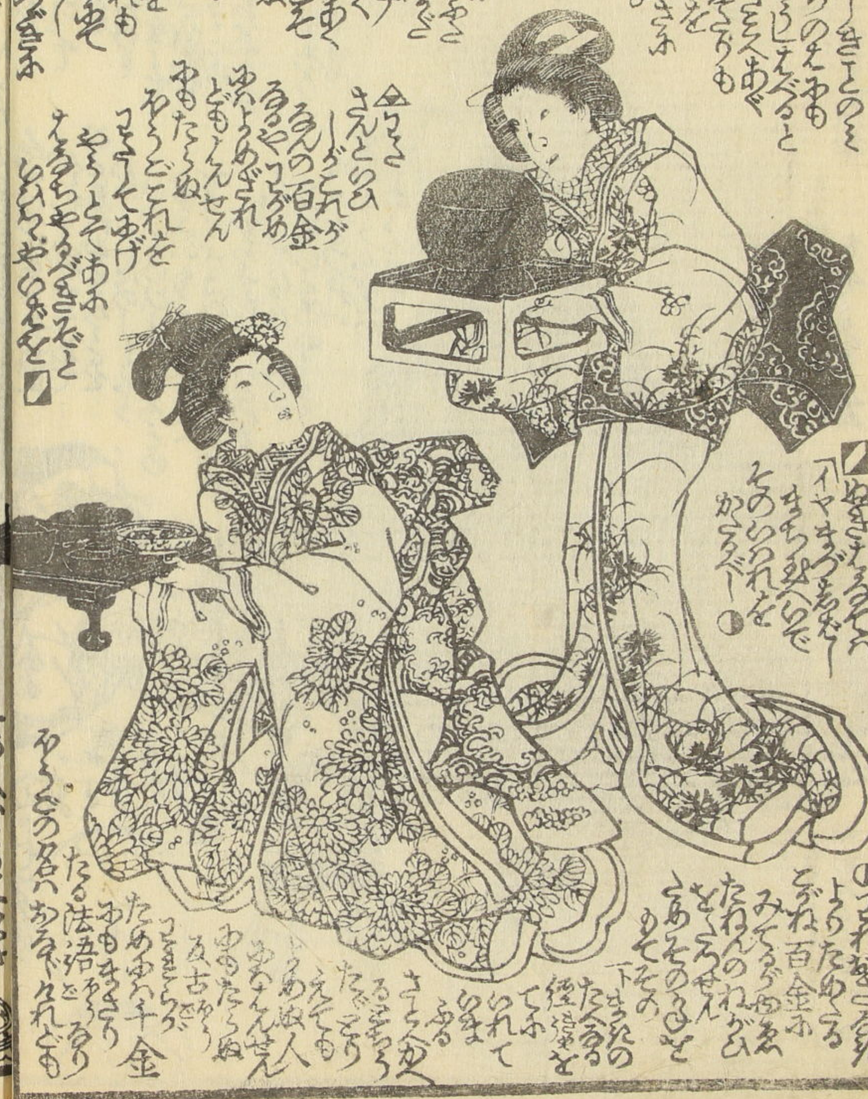
風前燈

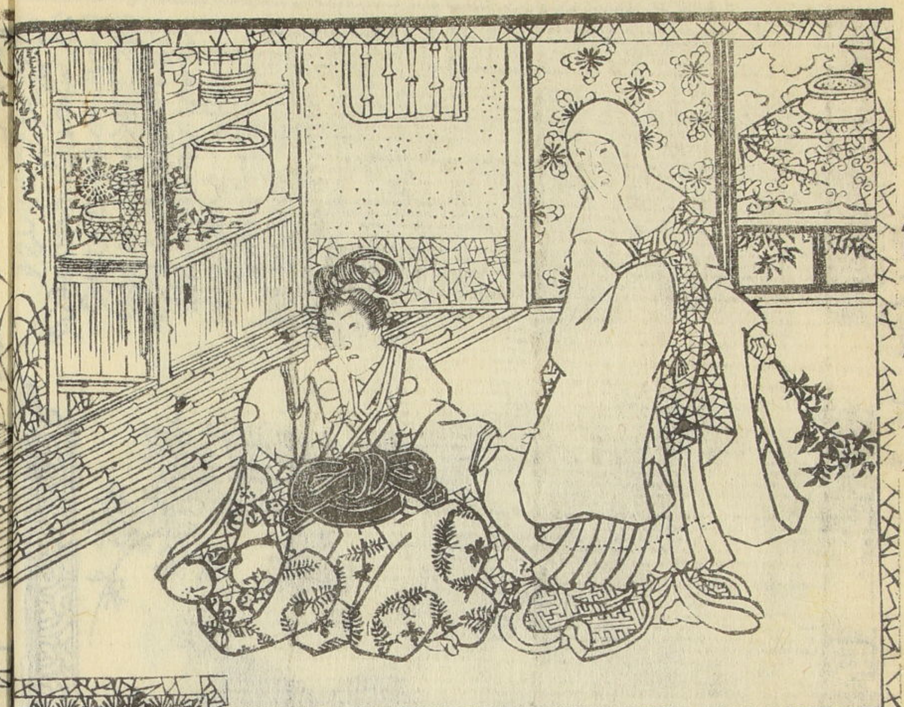


[よくしんてめ]さるゑどふせそん
いーさびたのだめうけんが
へんちうのそろ
ちうあどふちう
ちうあてんだん
つちうとうあの
てんがのちう
そんちうんちう
わあなさうの
あやまちう
うれしう
れしう
ひのきう
ふつたて
みきく
らんぐ
のそるう
ゑどふる
らんの
うちゆて
たつしゃ
るうめ
のそだう
らどゆう
くせまあり
てうちうぎょのかなと
つけまつうんと[つけく]

女
う
河
目
全

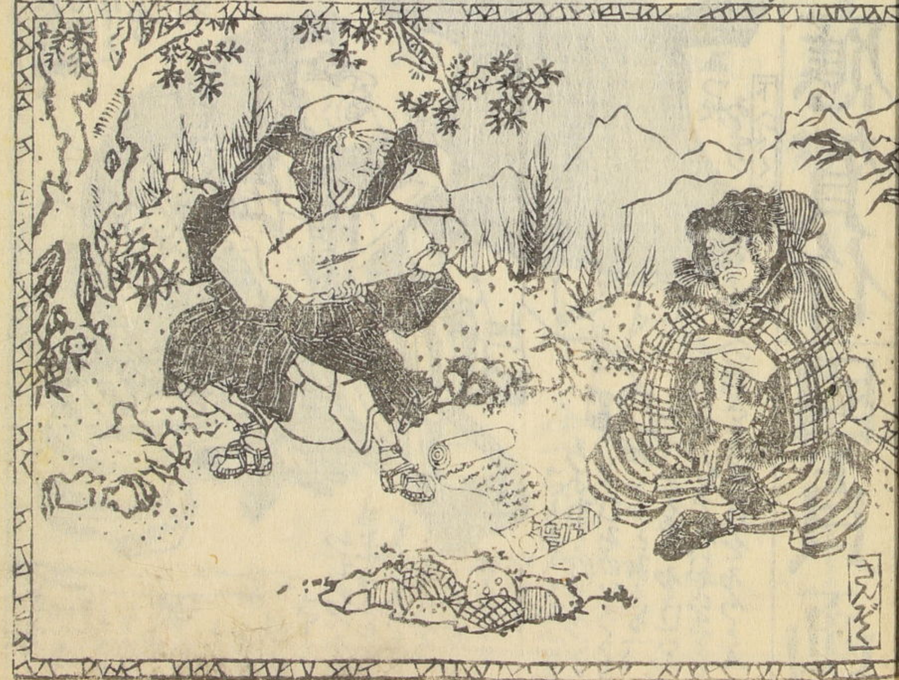






つづき　そのひとまるのあきことらくるへ
ゆくふあるや　「されば」このひとまるきのおきあう
とあとくまるこたへ千万金のたくくを
うるうりくさうざいはりやうのとくこをあれ
さればそのことをまるゆんけんこうのよふ
らまれてふたへくうくひんおりまや
だのらくらくよゆてこれまことのらくふ
あくぎまうらくをとりとゆへ外ことうる
しめてたくくとうをぎををりておりとく
たのしひらくをのくれこもこのひとまるき
ゆへまとあらくのゆんけんくふるきことを
あくぎうるのをさとうまうこれけつこうる
たくうそうくせんこれゆ金うくふうれも
外をとうるちへせををもこくをあく
べうりれた外をとうるこゆひとこのひと
まるかあれたきるうち外もあんせんそうき
ゆもくをきををひとのうるたくへこと
まとこのたくうあそうくるか外のあくと
らふのりさてこのあをこいをたくへて
らゆくこのひとまるきをうゆふーてそうきらま
うをひとるこもあをまやらのちをうるへ

◆◆ひとをうやまーこうこうりどのるれとこれ
あるまりきふをつる金ん世ふのこーてまそのの
みやけふこたうのそれよりもまうこのさらふ
るふのけば役ふさうられていのちをうゆるをこう
まうこれをまうちゆ金ゆうりのゆをうりあをとれ
んをこれをうりりりりををうて山ぐちをるをとうへの
いのうちををうるをうこうをのうへのうちのたーゆも
うをあるうるをうこうふうをうれかれいはうこうる
だのよくゆてうんでゆるさんのさんをゆもたく
へうりくたうをものをむてかりをんをうこうるをて
よくこ心ゆうたへうるをこべをうこうをどまをこて
いうふのをうるうをうをどくふをさこもゆ山風をん
ていををかーをこうをけーて「けふをうこうるを」
まうりゆをーりうれをのだいよくふをうこうるを
こうるふをうをんのよくふゆをこれ又十ねんらの
らくをうのうをゆをうをひとをのいのちをの
せーをもゆををこれをうををまをうちのらへ
をこをうをうをうをこうこうのをををうれをこをうも
をくこうをうくをこうこうのをををうをうをうも
えゆくをこうりををこをうりをーこをもへをうをうも
百のをまうりもをうふをうををゆををふをうをを
をうりーをうをりをうをうをうをうをゆをもうをゆを
ふをうくをうをうをたをを山ぐちのをうりをうをふ
ねをうをのたうをうをををうをりをうをふ



應賀作　國貞画

安政五戊午年春新板目録

俠文庫　三十八編　三十九編　万亭應賀作　四十編　四十一編　一陽齋豊國画

重の井菱染別小紋　七編　為永春水作　八編　同　画

昔語小栗實説　二編　松亭金水作　三編　同　画

花山吹百人女郎　初編　柳亭種彦作　二編　同　画

大寶御江戸圖　極上摺　奉書六枚半續

常磐津懐中本　初編　二編　三編　四編

〈重　繪艸紙本類　人形町　上州屋重藏

歌川國貞畫

午春新版

万亭應賀作

仕題御多福

錦里堂梓

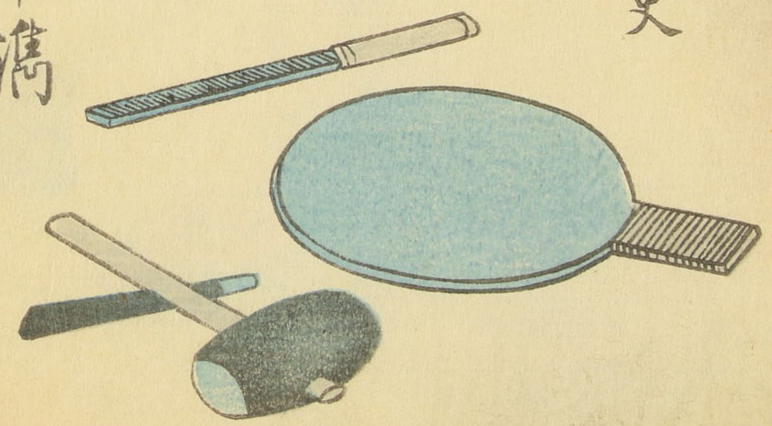
下

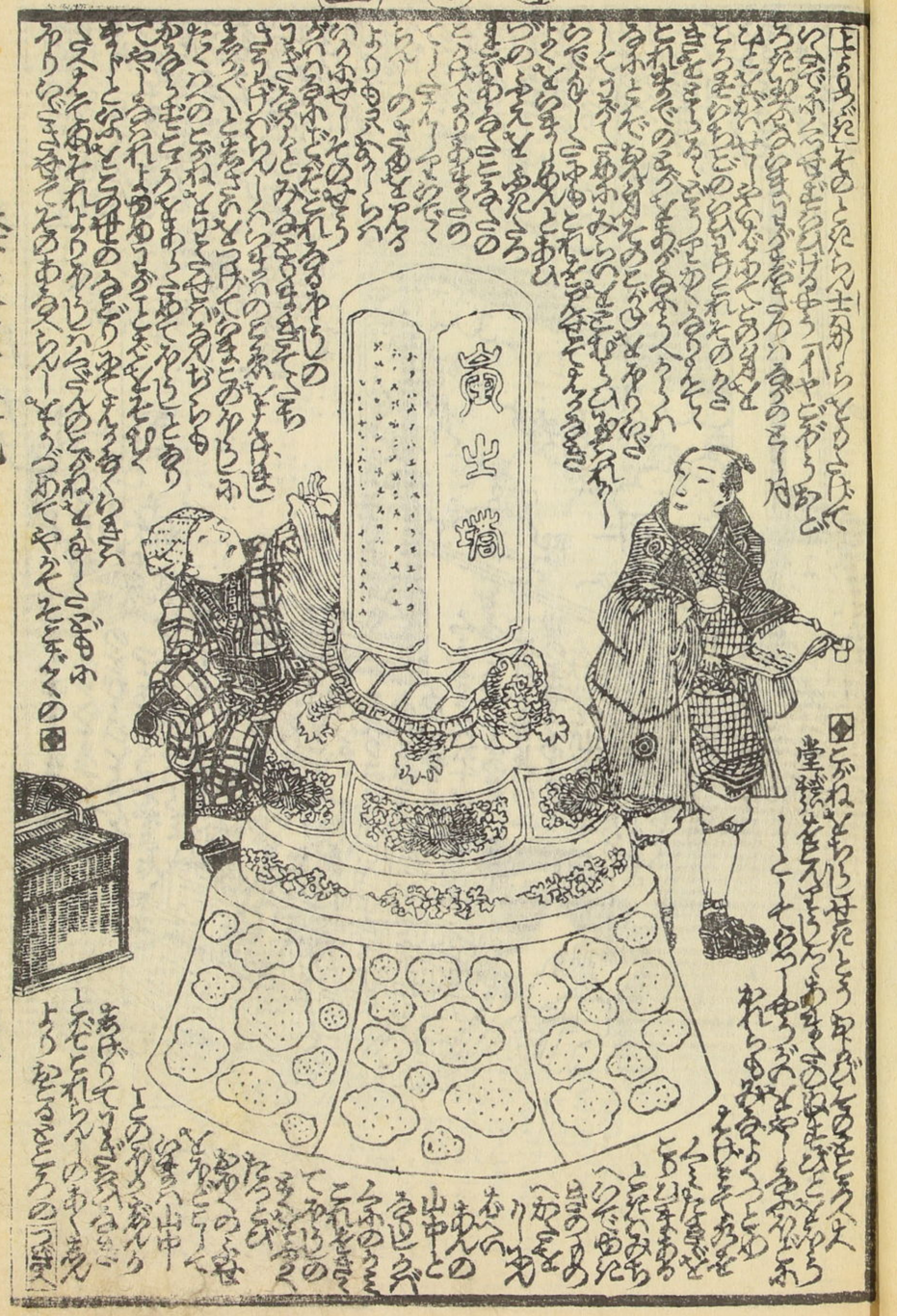
傳文庫 二十九編 下卷

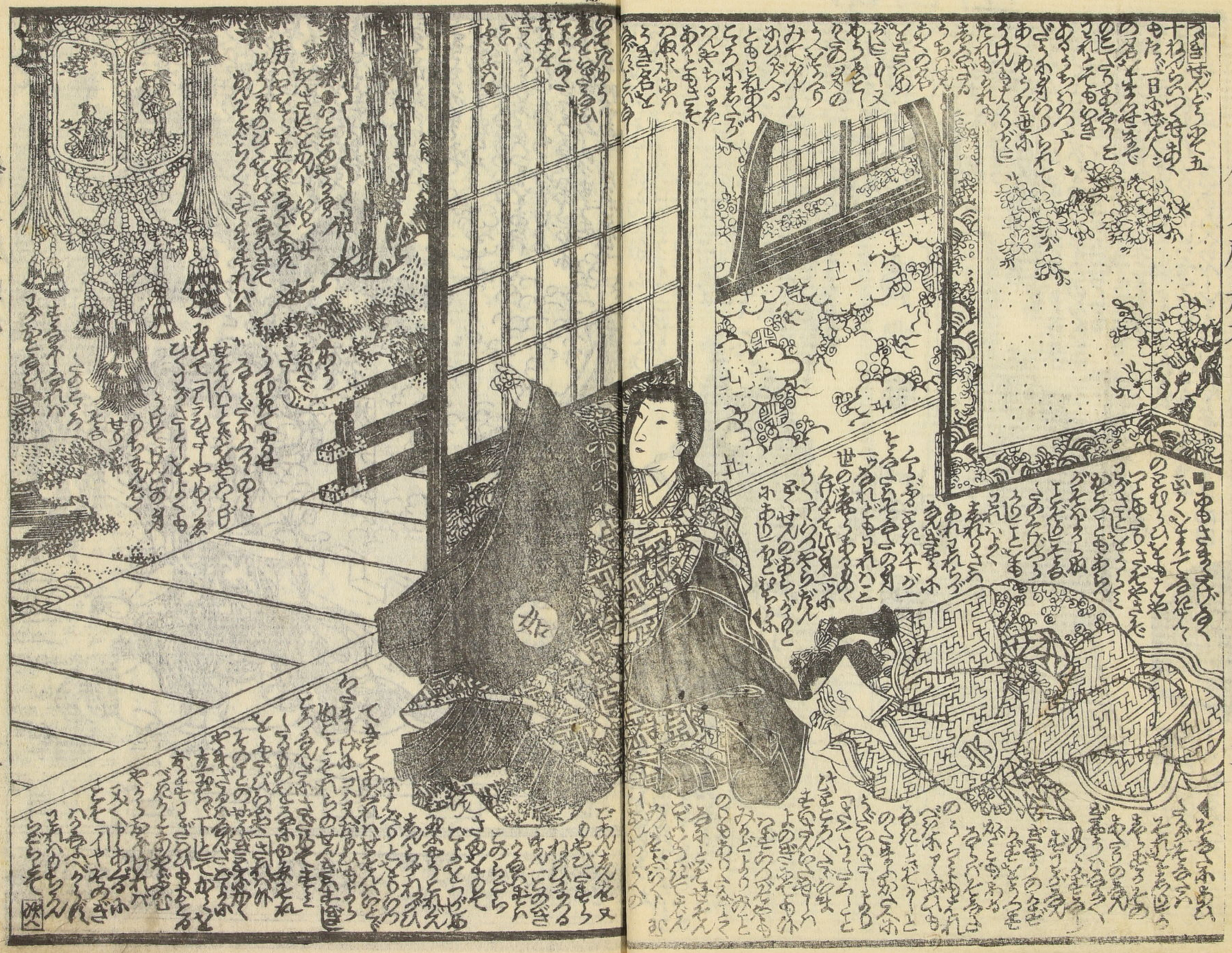
午夾彩史

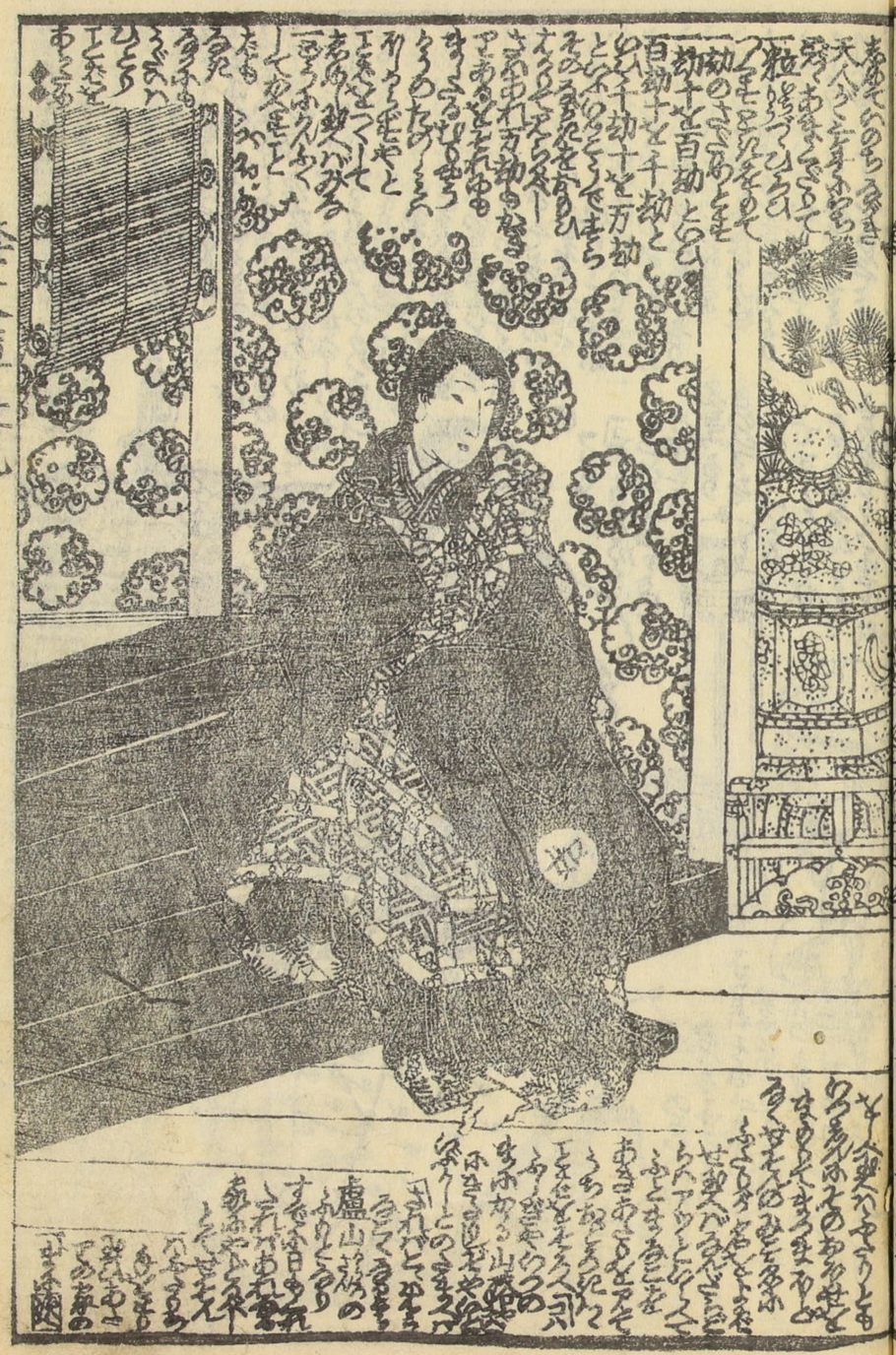
慶賀作

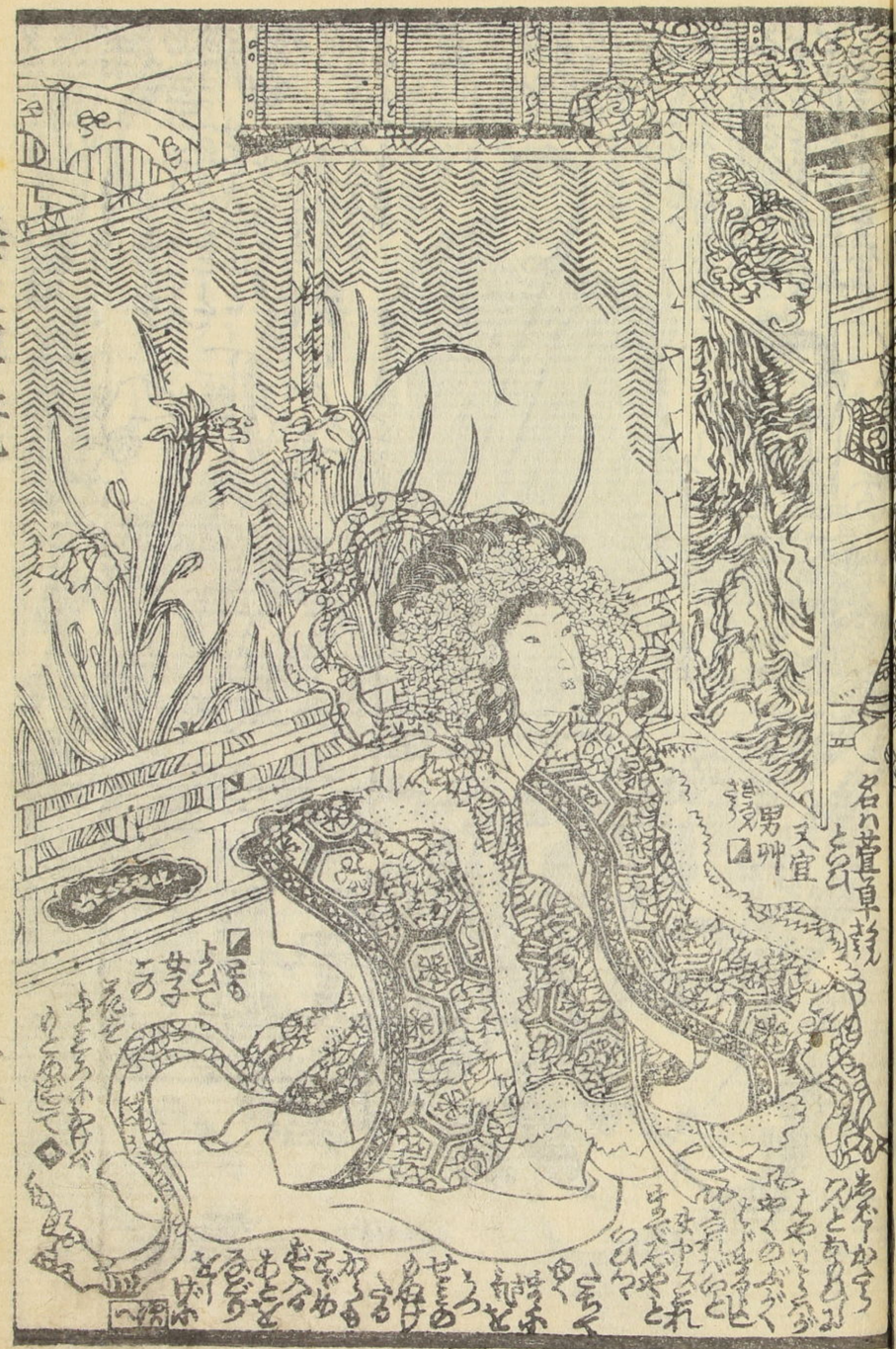
國貞画　上井屋開滿










名ハ萱草
男神
文宣

万亭應賀作の一壽齋國貞画

安政五戊午年春新板目録

傾文庫出世双六　万亭應賀作　一陽齋豊國画

春の手遊　将棋双六　同　歌川貞房画

男女振合　役替双六　為年の若んたん双六　同　一陽齋豊國画

武家奉公出世双六　同　同

奥奉公出世双六　同　同

子宝延命袋　全一冊　万亭應賀作　歌川芳玉画

重榮御江戸繪図　奉書四枚半續

浅草土産　初編より五編まで　十返舎一九作　当年新板　一陽齋豊國画

倭文庫四拾編

安政六
巳未春
新刊

外題豊多國多

上

倭文庫

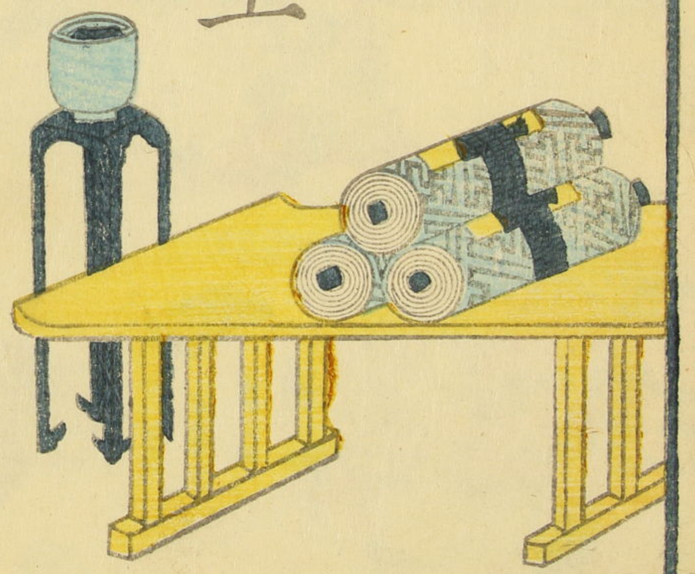
安政六
巳未春
新梓

四拾編

巻之上

万亭應賀作

歌川國貞画



人形町通
上州屋重藏板

釋迦八相倭文庫四拾編叙

夫經巻ふ有人物い其生と死と詳ふせば唯時宜の二條完而已と說めるれども信者の同行敢て夫と尋ぎ邂逅戲双史を見て善悪の應報人物の始有て終るれめ有ば少女も穴と穿く作者と諺噂甚しきれば二編ふ發覚る阿私陀仙を此編ゐて終せ兼て抱ゆ者の鹿野女の局或ハ丹車の身の終をも筆に貪所謂彼先へも一里後へも一里のるんざ間の宿ふ休て本意を噂ふ邪風と引ハクサメくの氣障を除く爲あるふと和

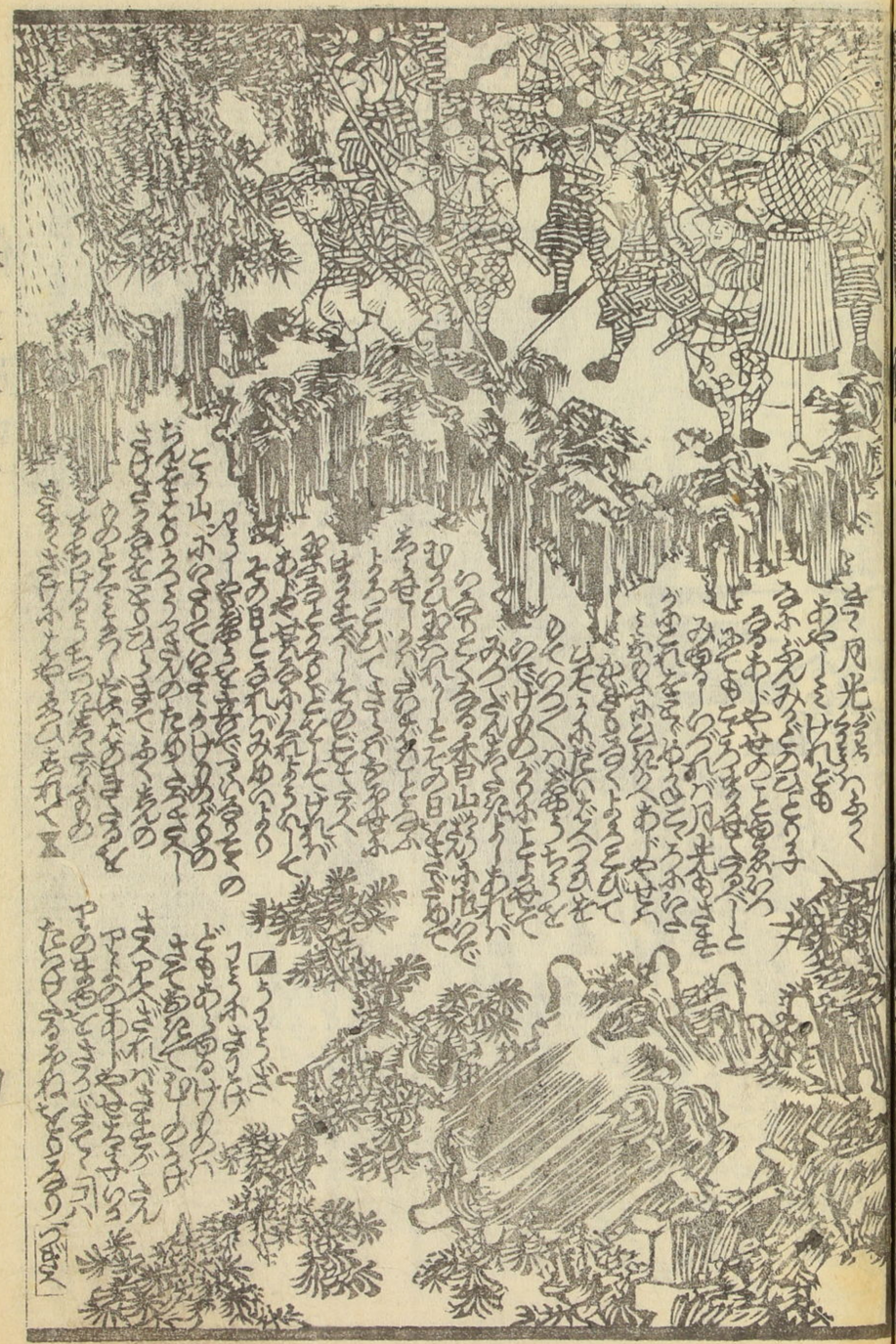
安政六巳未年
孟陬吉旦發行

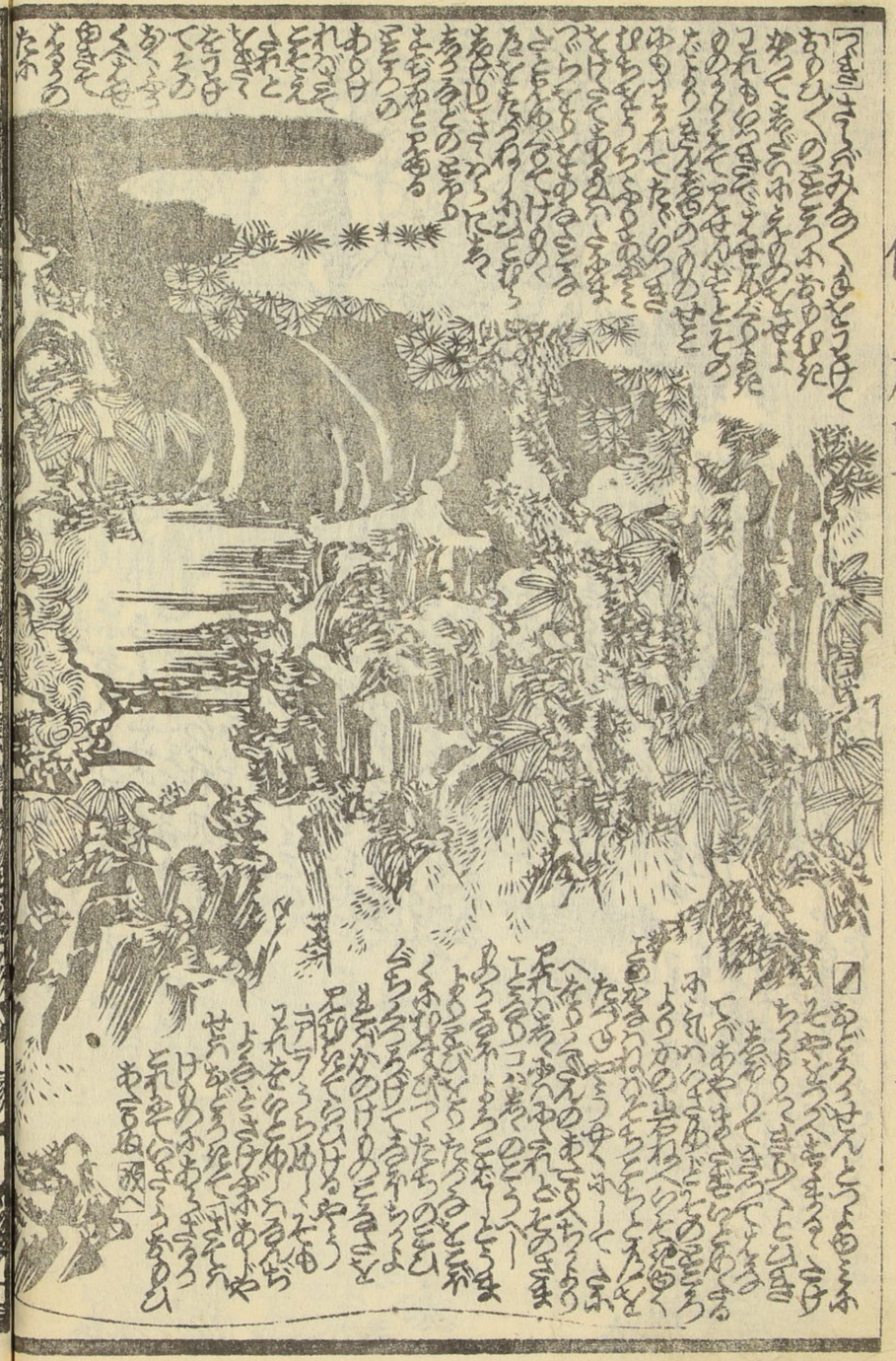
万亭應賀誌

提婆達多
伊奈利国香
仙の峯おそ
偽の天女を
ろそ阿闍世太
子に媒妁を
提婆達多
阿闍世太子

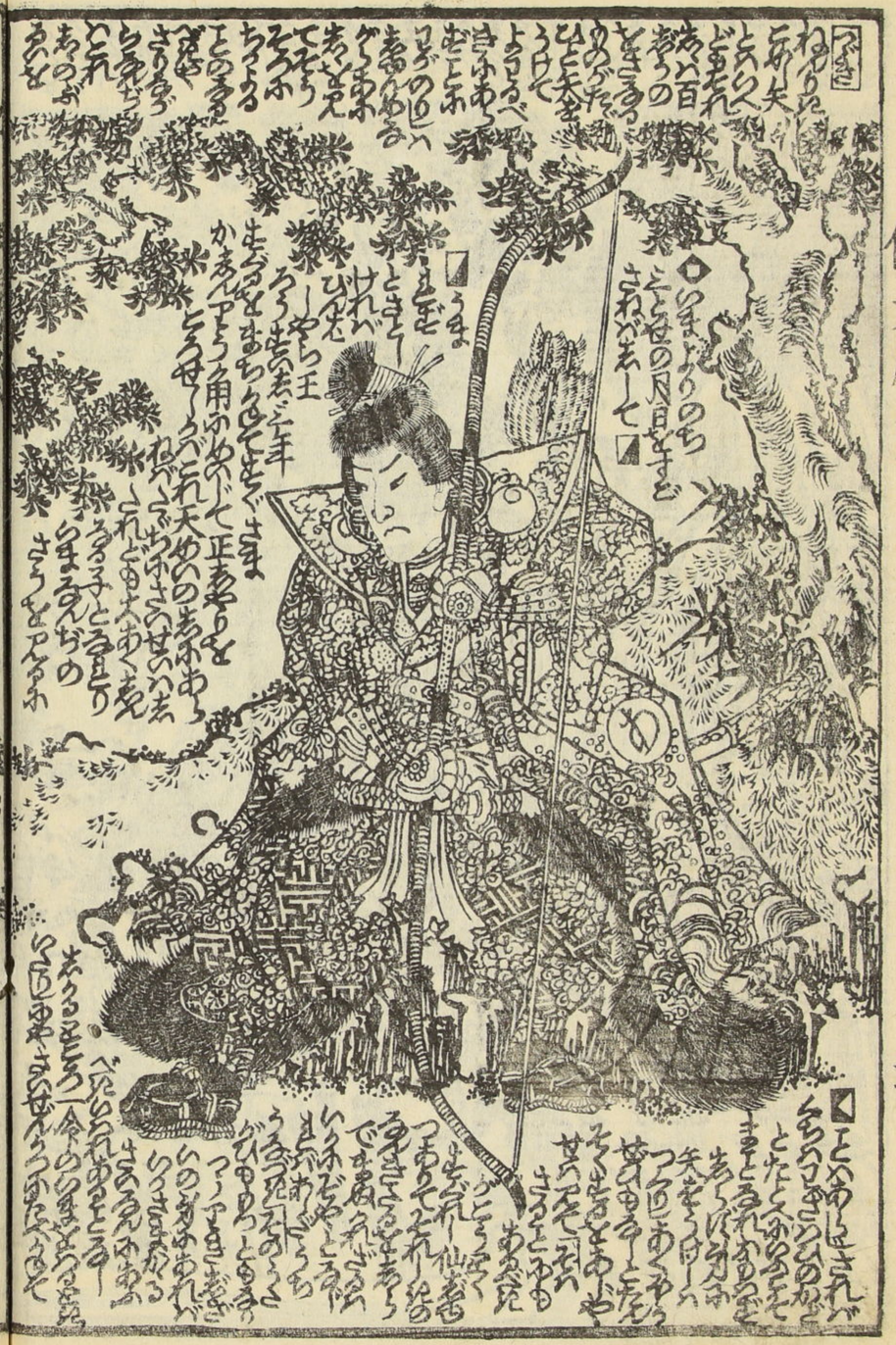
天女実ハ法性妙頭

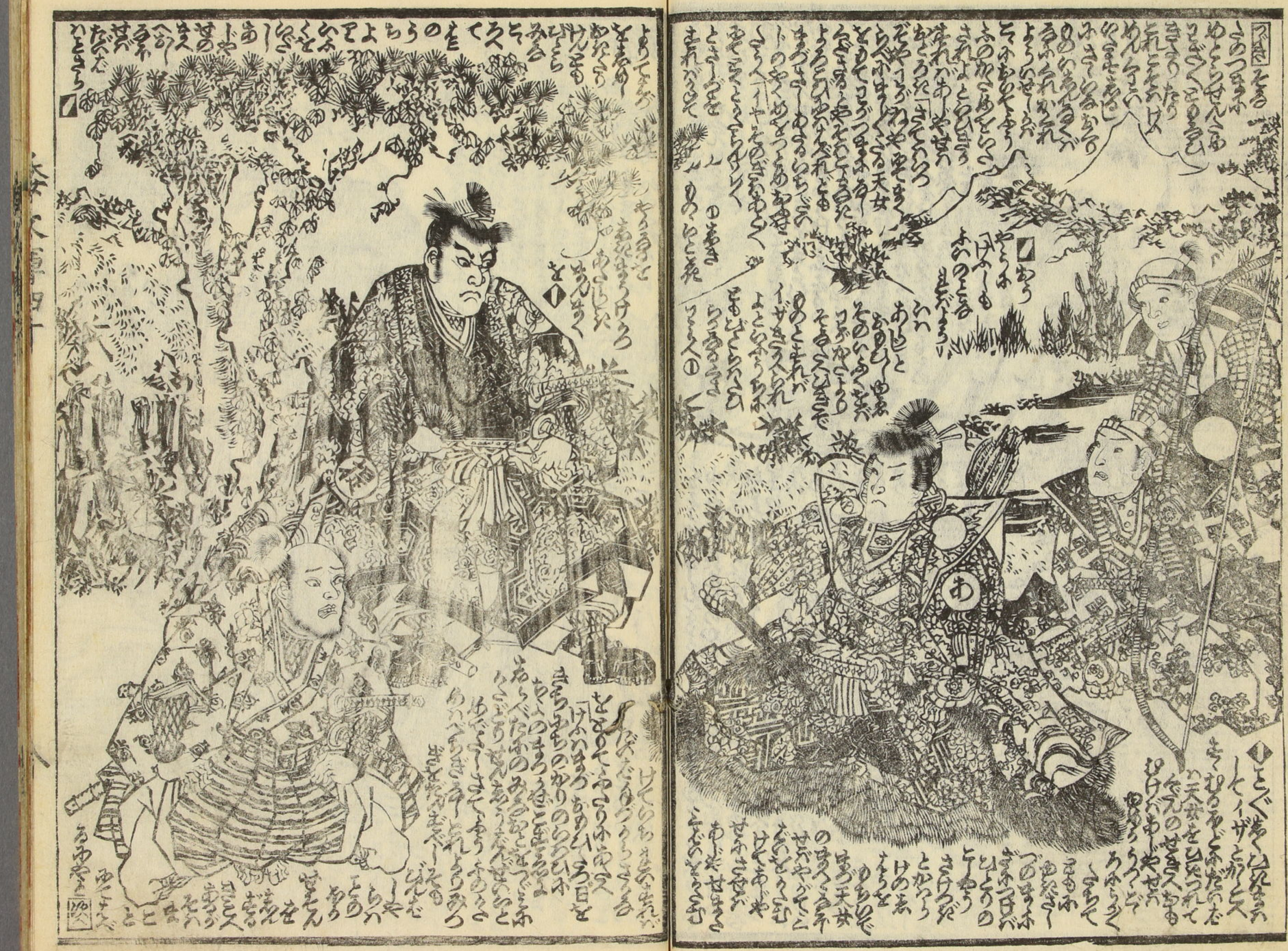
世尊
迦毘羅城の上鶴衆
世尊ふ法衣と献ぎ
舎利弗尊者
迦毘羅城の惣女中
優婆夷の女房
好容夫人
鹿野苑の長者女

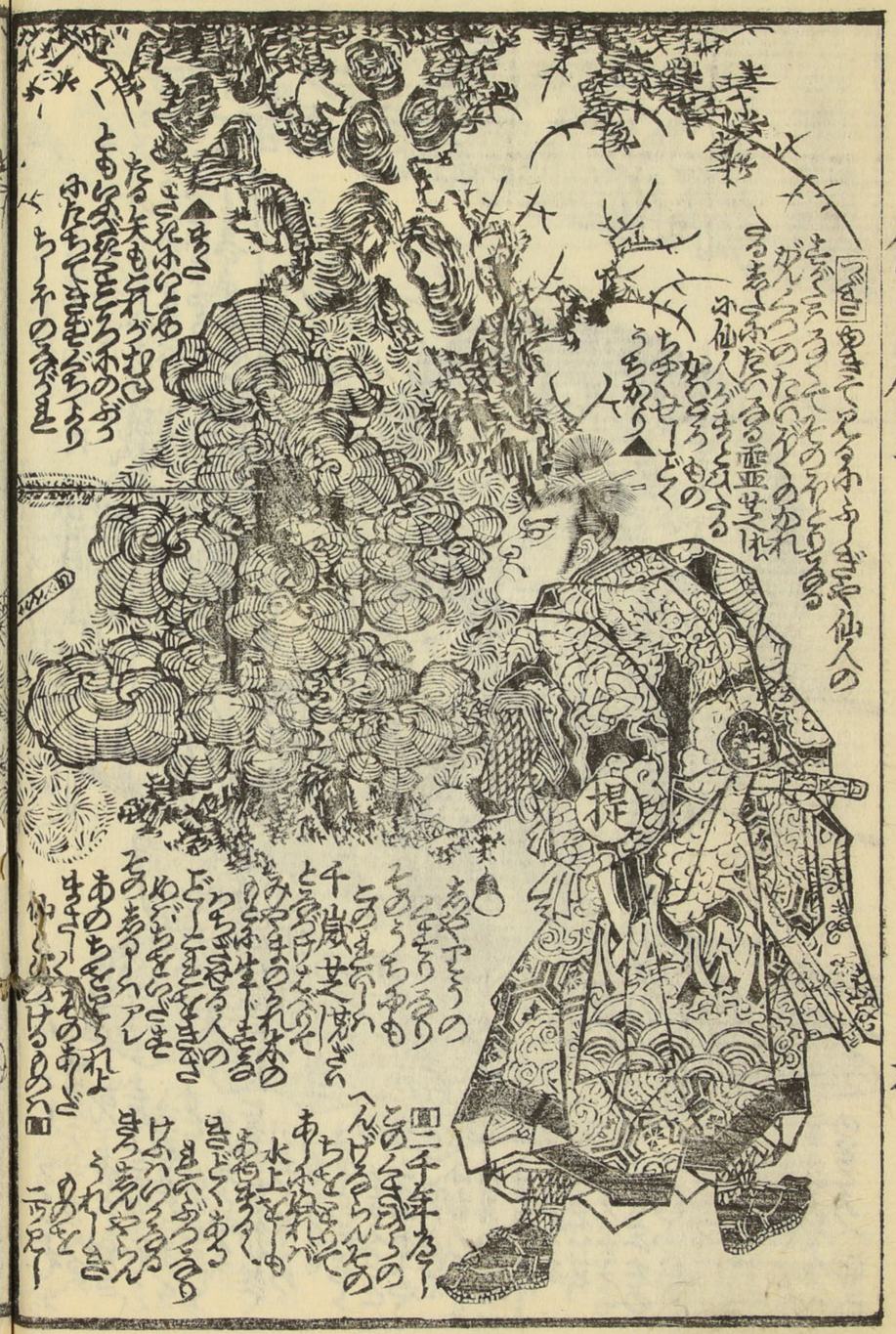




「つまき」さてみのくまとうけて
おのひくのをとろふおのひとり
ゆくてきぞこのゆえそのこせ
これもいのまぞそなたんとこ
のあるくそそなたんとそのこ
だとりきんきのものせと
ゆのようれてたらつき
ひちをうちくゆるものをこ
をけてをあるいくをゆを
つらくををあるをこをる
をとをたつわーれをとを
ををひをさをうにたち
ろろをのをろをををの
ををつのをををををを
あるけれがををををを
をををえをれをとを
をををてをうをてをを
をををををををををを
をををををををををを
をををををををを






提

安政六年巳未春新板目録

倭文庫　四十編　四十一編　万亭應賀作
四十二編　四十三編　一陽齋豐國画

重の井菱染別小紋　八編之為　永春水作
昔語小栗實説　二編松亭金水作
三編同　画
花山吹百人女郎　初編柳亭種彦作
二編同　画
大寶御江戸圖　極上摺　奉書六枚半續
常磐津懐中本　初編二編小本
三編四編形附有り　極上摺
〈重　繪州紙本類人形町　上州屋重藏

歌川國貞画

万亭應賀作

上州屋板

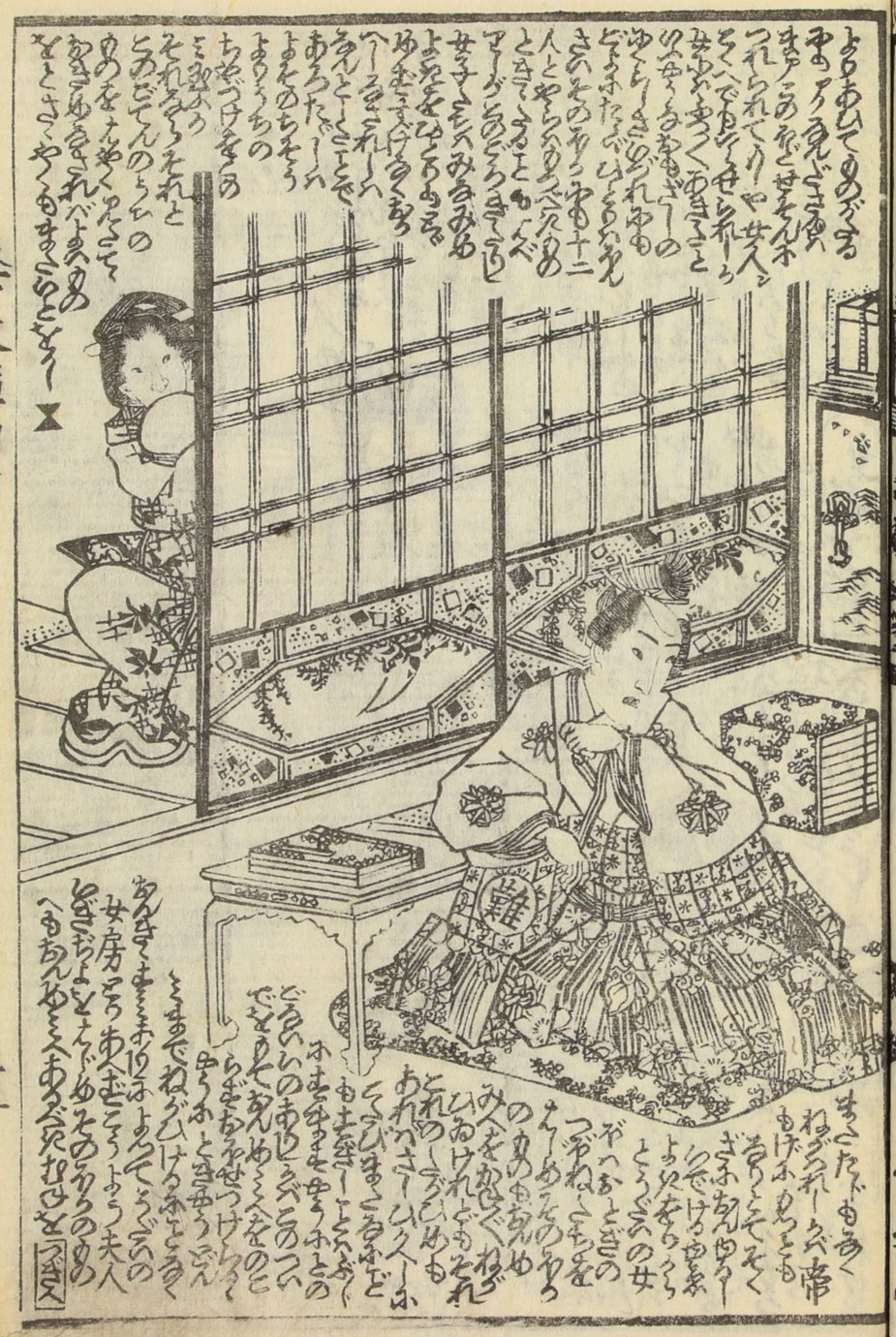
下

傳文庫

四格編巻之下

應賀作　　筠重堂

國貞画　　上梓

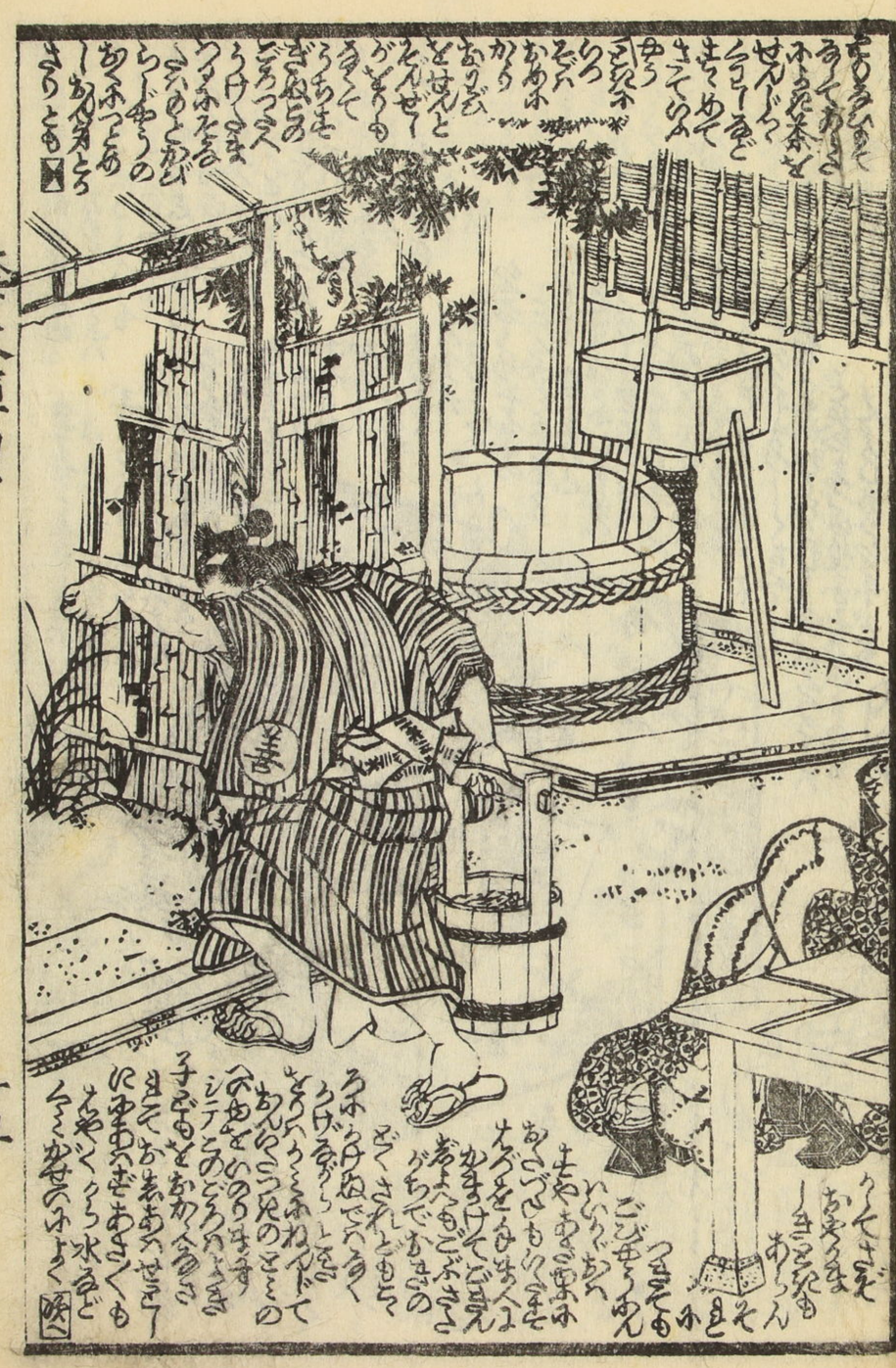


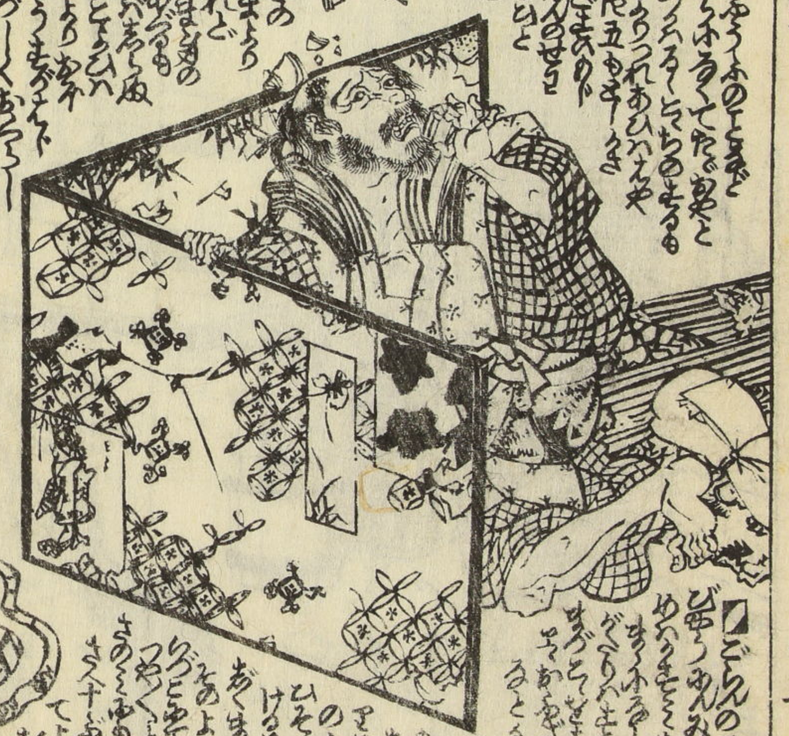
◆あさまさいさ
まろむしんのきさ
らさーんや月の
ゆくまるをあるい
やるーかて
ある日若子
わひとり
なさるあの
た山をさん
まさるあの
しるたを
ひとりのいとぐ
ふあしけるぐ
かれいなとるれくーく
この月いるるるるるりめ
るれべるふとをやるし
ぬるれるータハせんといの
あるりとたのめたるる
子ひとりのうちふこんとき
ものをひろうこりとれを
れてるちうこりやこりの
めのせをとらこをまさ
とまつひふつうんときを
ぐとるるこもんらもとく
かれがるをでびのあるふも
たるれをそのるくるもふ
れもどしてこるりくゆ
るひあきるあるそこの

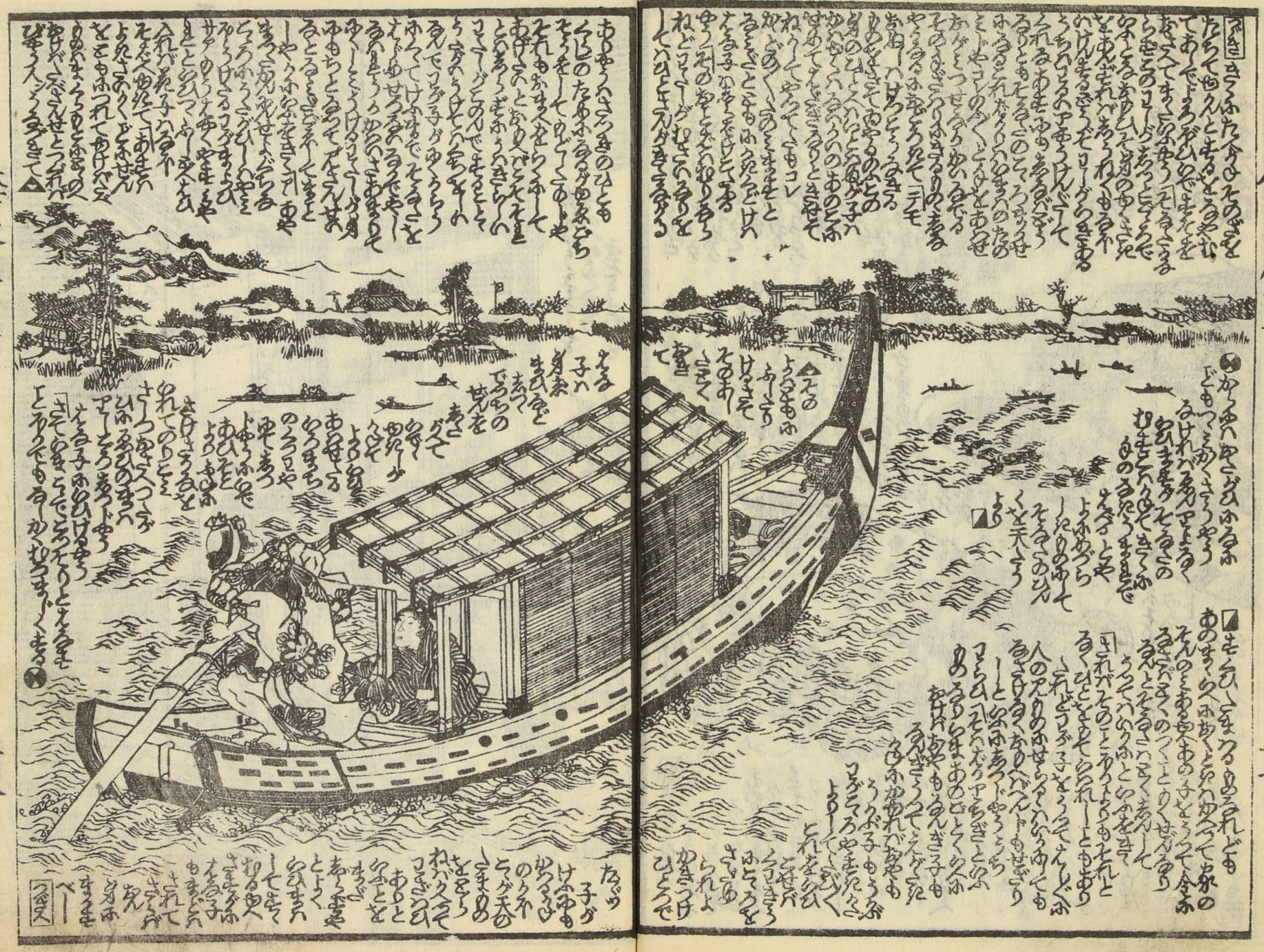
あるこ子ぐるを
ひとふかの
ぐるるを枕秋
刺りとの
めるをるふ井
戸れば
このを水を
もらひて
あさのの
たをけ
とまれば

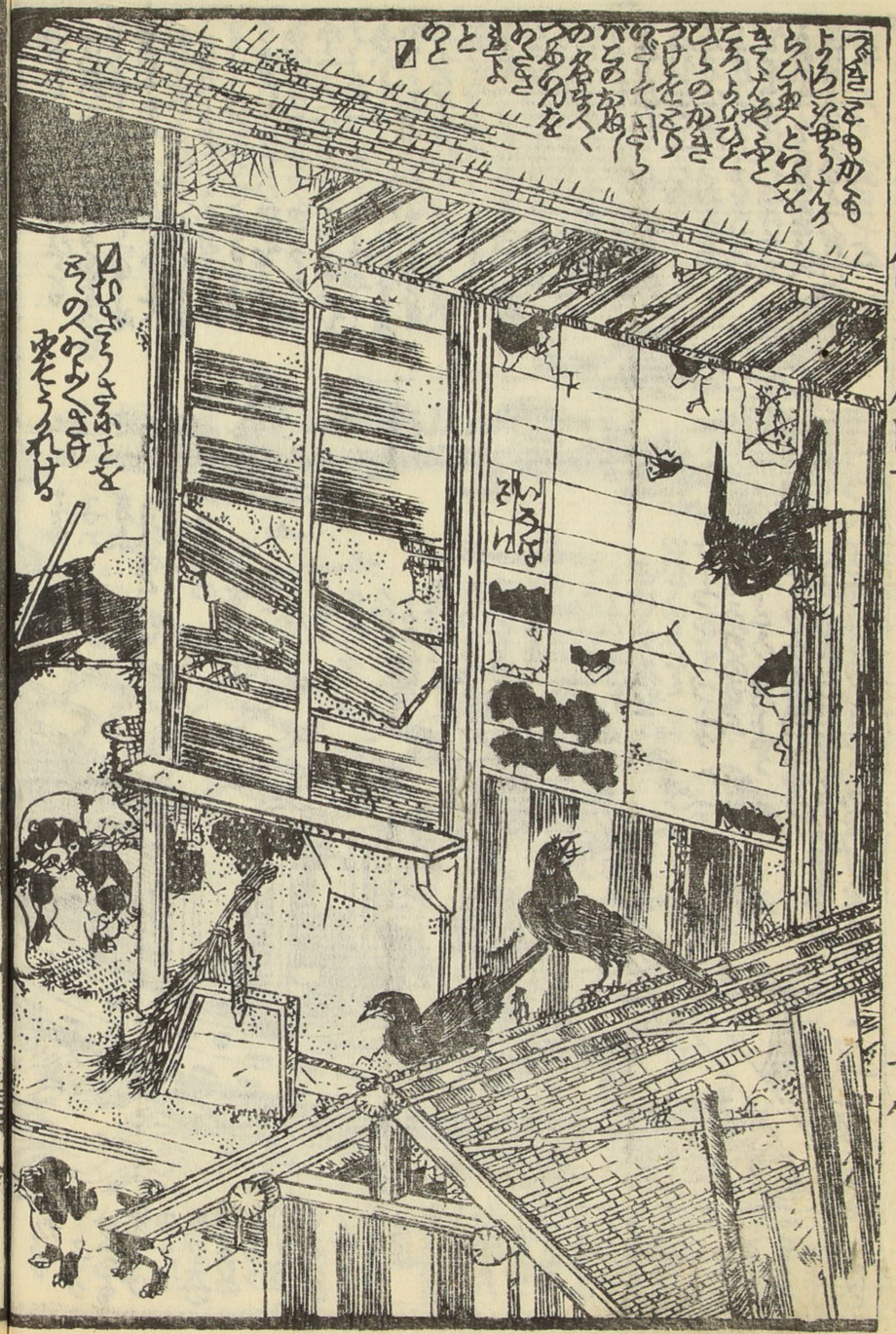
◆りうこうふ
おどりをきて
さまぐのちんを
ゑどりうより
のとめそうれ
とるどもう
子ゆもかー
きそひとり
たのーむ

うう
どもうり
そろやまく
あたるふを
あるーどりの
ちく丹車
しんりうて
こるりのふう
ふのぶせきうら
をたあるどりそちん
のまえでびをる
月こちいまびくも









安政六年巳未春新板目録

倭文庫出世双六　万亭應賀作　一陽齋豊國画

春の手遊　将棋双六　同作　歌川貞房画

男女振合　役替双六　梅の春の花見　同作　一陽齋豊國画

武家奉公出世双六　同作　同画

奥奉公出世双六　同作　同画

子宝延命袋　全一冊　万亭應賀作　歌川芳玉画

重榮御江戸繪図　奉書四枚半續

浅草みやげ　初編より五編を　十返舎一九作　当年新板　一陽齋豊國画

禁玉帝
之秘教